

## 【論文】

## 就学前児童への外国人親の母語の継承における社会心理的要因

在日外国人母親によるナラティブを中心に

ゴロウイナ・クセーニヤ\*

吉田 千春

(東京大学グローバル  
コミュニケーション研究センター)(明治大学大学院  
国際日本学研究科)

## 概要

本研究の目的は、在日外国人親の子どもに対する家庭の言語教育の状況・取り組みを明らかにし、母語の継承を妨げる社会心理的要因を見出すことである。そのため、母語維持の視点から外国人住民をサポートすることを目指し、調査を行った。その結果、子どもへの母語の継承に影響を与える主な要因は、「外国人母親の受け入れ国の言語能力」、「外国人母親が自分の母語を使いにくい日本社会」、「日本におけるジェンダー役割分担による女性の負担」、「夫が妻の母語を学習するという互酬的な行為の無さ」、「外国人母親自身が子どものエスニックアイデンティティについて模索の段階にいること」の5つがあることが明らかになった。

Copyright © 2017 by Association for Language and Cultural Education

キーワード 母語の継承, バイリンガル教育, 在日外国人母親, ハーフ, 社会心理的要因

## 1. 問題の背景

## 1. 1. 国際家族の背景と問題

日本では、マーフィ重松 (2014) が指摘するように、国際結婚が 2007 年に 18 組に 1 組というように大きく増加し、今後も増え続けると想定される。ここ数年の日本における国際結婚の数は、不景気や東日本大震災などにより一時的に減少したが、現在、

訪日ブーム<sup>1</sup>、2020 年開催予定の東京オリンピック、文部科学省が支援する大学のグローバル化の進展や与党の公約 (2014 年) に挙げられている「経験・技術を持った外国人材」の積極的な活用の方針などにより、日本を取り巻く人々の移動が高まり、より多くの外国人を日本に引きつけ、日本で子どもを産み育てる国際家族も増えると予想される。

国際家族の子育ての問題としては、社会生活上の言葉の問題、経済的問題、就労、保育、親子間の文

\* E-mail: kgolovina@cgcs.c.u-tokyo.ac.jp

<sup>1</sup> 日本政府観光局 (2016 年 4 月) のデータによると、日本を訪れたのは前年同月比 18.0% 増の 208 万 2 千人であり、過去最高記録である。

化変容差と親子関係の問題（具体的には母語の継承など）、子育てに関する不安、社会保障制度の利用の制限等が挙げられる（武田，2007）。また、著者らの在日外国人の研究からは移住者第1世<sup>2</sup>が子どもに母語の継承を行うことに伴う問題が明らかになった（ゴロウイナ，2017，pp. 391-394）。更に、2014年以降著者らが主催した在日外国人親子を対象とした「イクリスせたがや」<sup>3</sup>の実践から、第2.5世の子どもへの母語の継承に関する問題の重要性が改めて浮き彫りになった。

## 1. 2. 問題提起

母語の継承に関する日本を対象とした先行研究では、子どもが母語に関心がないなどの親の悩みや言葉の問題を巡る親と行政担当者・支援者の考え方の不一致（武田，2007）、母語を二次的に考え、子どもに母語を学習させず、日本語のみを学習させる外国人親の存在（Basova，2013）、また、母語教育を試みた学校側が抱えている困難（例えば、学習者の多様性を反映した適切な授業のデザインを行う難しさ）（齋藤，2005）などが挙げられている。しかし、母語の継承は、Weatherford（2006，p. 209）が指摘しているように、どんな状況であっても、外国人親が自分の子どもと親密なコミュニケーションを取り、分かち合うことができるものとして非常に重要であり、先行研究からも母語の継承を有意義なものとし

て捉える研究が増えている<sup>4</sup>。

また、日本では学校や地域において、わずかではあるが母語教育に関する取り組みが行われるようになってきた（齋藤，2005；Gottlieb，2012）が、それらの多くは就学年齢の子どもを対象としたものであり、就学前の子どもを対象としたものは殆どない。しかし、就学前はバイリンガルになるための基礎を作る時期だとされており（中島，2016；など）、この時期の言語教育は特に重要である。Shin（2013，p. 12）は、小さい時に外国に移住する子どもは受け入れ国で学校に通いはじめると、マジョリティ言語である受け入れ国の言語が優位に立ち、たとえ、父母が同じ言語を話す外国人でも、減法バイリンガル（母語のモノリンガルから受け入れ国の言語のモノリンガルへの移行を指す）になる可能性が高いとしている。このような問題を避けるためには就学前の家庭における母語教育が不可欠である。特に、日本生まれのハーフ（「ダブル」と言われることもある）の子ども（第2.5世）<sup>5</sup>は、就学前に外国人親の言語の基礎が作られない場合は日本語のモノリンガルになる可能性が高いと思われる。齋藤（2005）の研究では、就学年齢になり母語も日本語も年齢相当

<sup>2</sup> 移民世代を記述する方法である。第1世は大人として移住してきた者、第1.5世は、受け入れ国に幼い頃に移住した者、第2世は両方の親が受け入れ国において外国人（第1世）である者の子ども、第2.5世は、1人の親が現地の者、もう1人の親は第1世の外国人である者の間に生まれた子どものことを指す。

<sup>3</sup> 多文化共生のための子育てに関する活動を行う非営利団体。「イクリス」は「イクリスせたがや」、「イクリスしんじゅく」、「イクリスいちかわ」の3つの団体から成る。著者らは「イクリスせたがや」の代表、副代表をつとめている。

<sup>4</sup> 異なる言語話者が結婚する場合の子どもへの言語継承の研究は19世紀にさかのぼるが、Chirsheva（2012）によれば、初期段階（1913～1939）や発展段階（1939～1975）、現代段階（1975～現在に至るまで）を経て、子どものバイリンガリズムにおける更なる課題やアプローチ、また、これらのアプローチの効果を証明するデータが蓄積されてきている。上述の段階において、二つあるいはそれ以上の言語を同時に習うことは、習得者の知的発達にネガティブな影響を及ぼし、マジョリティ言語の純正さを脅かすことにより受け入れ国にとって社会問題であるというかつての見方から、知的発達にも、多文化化を背景とした現代社会にとって有意義かつ自然であるという見方を支持する研究まである。

<sup>5</sup> Basova（2013）が述べるように、日本では、親のどちらかが日本人である子どもは日本人と見なされるので、その個別の統計が存在していない（pp. 349-348）ため、本グループの言語上の状況が見えにくい。

の力に満たないケースが報告されており、入学前に言語の基礎を築く重要性が示唆されている。

さらに、女性移住者第1世で、子どもの誕生が来日して間もない場合は、サポートが得られる十分なネットワークがないことも特徴であり、子どもへの母語の継承に積極的に取り組むことが難しいことが多い。また、子どもが就学前で保育を受けない場合は、行政との関わりが少ないこともあり、言語状況が問題として見えにくいのが現状である。そのため、移住者第1世である外国人親が日本生まれの自分達の子どもに対し計画的な母語の継承ができるように、この時期における支援は特に取り組むべき大きな課題であると考えられる。

その上、英語圏以外の話者に関しては、母語の継承についての研究や実践がまだ不足している。日本では、学校の英語教育をはじめ、交流やメディアを通して英語に触れる機会を見つけることは比較的容易であり、世界の共通言語である英語を話す意義は見出しやすいと思われる。日本における言語方針を長年に渡って研究してきた Gottlieb (2012, p. 62) は、日本では「英語がすべて」<sup>6</sup>であるのに対して、英語話者以外の言語を教える取り組みは稀であると指摘している。日本では、バイリンガルの言語教育に関する正式なプログラムがなく、言語に関するサポートは非営利組織やボランティアに頼らざるを得ない状況である (Basova, 2013, pp. 350-349 ; Yoneno-Reyes, 2015, pp. 30, 32)。このような事情が背景にあるため、英語圏以外の在日外国人にとって、子供が生まれた場合、母語の継承を後押しする手段が限られている。しかし、在日外国人の母語の多くが英語圏以外ということを考えると、英語圏以外の母語継承の研究や実践が重要である。

以上の理由から本研究では、就学前の児童を持ち、日本人と結婚している英語圏ではない移住者第1世の外国人親に焦点を当て、実践や調査研究から子どもへの母語の継承に内・外的影響を与える要因を考察する。また、対象をなるべく狭く定めることで、母語の継承における細かな問題を見出すことを目的としている。

## 2. 調査概要

「イクリスセたがや」の実践では、今まで行われることが少なかった、英語圏に限定されない就学前の子育て家族を対象とした活動を中心に行っている。これらの実践から、母語の継承に関する不安や悩みを抱えている家族が多く、重要性が浮かび上がったため、2015年4月に就学前の子どもを持つ国際結婚家族を対象にした家庭の言語教育を考えるための新たなプロジェクト<sup>7</sup>を発足させた。このプロジェクトでは、インタビュー調査とワークショップの実践を同時並行で実施した。本研究では、この調査研究と実践から在日外国人親の子どもに対する家庭の言語教育の状況・取り組みを明らかにし、母語の維持を妨げる内・外的要因を見出し、今後の外国人住民のサポートにつなげることを目的とする。次に、本研究の分析対象であるインタビュー調査とワークショップの実践の概要について詳述する。

### 2. 1. インタビュー調査

個々の家庭の言語教育の状況や問題を詳細に把握することを目的に、インタビュー調査を実施した。インタビュー調査の概要は表1の通りである。インタビュー調査を行う前に、家庭の言語状況に関する

<sup>6</sup> その他、日本における英語の全面的促進によるその他の言語が周辺化されてしまう視点を取り入れた議論について、Gottlieb (2012, pp. 64-67) や Hatori (2005) を参照。

<sup>7</sup> この研究は次の助成金の一部として行われている：JSPS 科研費 24520584 『地方自治体による外国人主体の支援モデル「外国人人材育成講座」の試み』（研究代表者：徳永あかね）。

簡単なアンケートに記入してもらい、その後、半構造化インタビューを行った。3名のインタビューは協力者の許可を取り録音し、全て文字化した。ロシア語で行われたインタビューに関しては、ロシア語に文字化した後、日本語に翻訳したものを分析データとした。

表1. インタビュー調査の概要

	調査日	インタビュー時間	使用言語
ローラ	2015年5月	約70分	ロシア語
アンナ	2015年5月	約90分	ロシア語
マヤ	2016年1月	約100分	日本語

インタビュー調査の対象者は3人の在日外国人母親で、詳細は表2の通りである。ここでは匿名を利用し、それぞれをローラ、アンナ、マヤ<sup>8</sup>とする。ローラはX系<sup>9</sup>ロシア人で、24ヶ月の子を持つ1児の母、アンナはロシア人で、41ヶ月と14ヶ月の子を持つ2児の母、マヤはタイ人で、21ヶ月の子どもを持つ1児の母である。

来日歴は、表2で分かるように、アンナが一番早く2007年、その次(2008年)にマヤが来日し、一番遅く来日しているのは2012年に来たローラである。3人の主な共通点は年齢が近く、高学歴(ローラ:母国での理系の学士、アンナ:日本での文系の博士、マヤ:日本での経営学修士)で、夫が企業で働く日本人の妻(ローラの場合、Y系日本人)という点である。ローラとマヤは来日前にフルタイムの勤務経験があり、後者のマヤは日本でも正社員として働いた経験がある。また、3人の中で最も高学歴であるアンナは、母国でも日本でも短期間のアルバイトの経験しかない。3人は現時点では、働いてお

らず、子育てに専念している。世帯年収についてはミドルクラス以上の層に属していると言える。語学力は、3人とも高い英語能力を有し、また、日本語については学習段階にいるローラ(初級)以外、上級のレベル(日本語能力試験1級)であり、アンナは大学の主専攻でもある。インタビュー前のアンケートには、ローラとアンナはロシア語、マヤは英語で記入しており、インタビュー自体はローラとアンナとはロシア語、マヤとは日本語で行われた。子どもは、週2回幼稚園に通うアンナの上の子ども以外、保育を受けていない。

表2. インタビュー協力者の概要

	ローラ	アンナ	マヤ
エスニシティ	X系ロシア人	ロシア人	タイ人
年齢	29歳	31歳	33歳
来日年	2012	2007	2008
教育	学士	博士	修士
日本語レベル	初級	上級	上級
職業	専業主婦	専業主婦	専業主婦
夫のエスニシティ	Y系日本人	日本人	日本人
夫の職業	サラリーマン	サラリーマン	サラリーマン
子どもの人数	1人	2人	1人
子どもの年齢	24ヶ月	41ヶ月 14ヶ月	21ヶ月

夫の外国語能力については、ローラの夫は彼女の母語が一切分からず、マヤの夫は、彼女の母国に1年間留学した経験と独学により、日常レベルで理解できる。また、アンナの夫は、同じく彼女の母国に留学に行き、仕事でも使うことがあることから、上級に近いレベルである。英語については、ローラの夫はネイティブ並のレベルであり、アンナとマヤの夫も仕事などにおいて問題なく使用できるレベルとのことである。

上記に、3人の共通点や言語背景における特徴を挙げてきたが、本稿の主な課題と関係してくる彼女達の一番重要な共通点は、子どもに母親の母語を伝

<sup>8</sup> 敬称略。

<sup>9</sup> 本稿では、インタビュー協力者の匿名性を保護する目的で、特定のエスニックバックグラウンドを「X」や「Y」で示す。

えたいという強い気持ちにある。3人は「子どもは母親の母語を必ず知っていなければならない」(ローラ), 「読み書きを含めて, ロシア語と日本語のバイリンガルになって欲しい」(アンナ), 「タイ人でもあるから, ママの言葉も分からないといけない」(マヤ)と話しており, 母語の継承を重要なものと捉えている。上記から分かるように, これらのインタビュー協力者とその家族は, 高い学歴と語学力を有しているため, 日本社会にスムーズに統合し, その子ども達に問題なく言語教育を行うことができそうな印象を与える。しかし, 彼女達のナラティブから明らかになるように, このプロセスは複雑であり, 多くの要因から影響を受けている。彼女達は考え方や家族状況の面で多くの共通点があり, 似たような社会心理的要因から影響を受けることもあるが, 細かなところにおいて, それぞれ異なった希望や悩みを抱えており, 子育てや言語習得を取り巻く問題には高い個性があることが見えてきた。

## 2. 2. ワークショップなどの実践

実践については, 主にワークショップ形式で行われたディスカッションと最後に参加者から収集したアンケートのデータを使用した。分析の対象とした実践は次の二つである。一つ目は, 著者らが運営する非営利団体「イクリス (Intercultural Child-Rearing Information Station: 多文化共生子育て情報局)」が企画して行った実践である。就学前の子どもを持つ国際家族を対象に, 家庭の母語教育を課題にしたワークショップを実施した (世田谷区: 2015年7月4日, 市川市: 2015年11月14, 21日, 新宿区: 2016

年3月20日)<sup>10</sup>。ワークショップは次の流れで行った。まず, バイリンガル教育の専門家<sup>11</sup>やバイリンガル子育ての当事者による講義を行い, その後, ワークシートをもとに各家庭の言語教育の現状を可視化し, グループでのディスカッションを通して各家庭に最適な言語方針を考えた。二つ目の実践は2016年3月26日に, 港区が主催した講座(「子どもの個性に寄り添った言語環境を考えよう～多文化家族のつながりを目指して～」)において講師をつとめたものである。この講座では, 日本に在住する国際家族を対象に, バイリンガル教育について理論編と実践編に分けてワークショップを行い, 参加者が現在抱えている言語教育の問題や今後の家庭の方針についてディスカッションを実施した。

著者らは「イクリスせたがや」のワークショップを主催し, 港区での講師を担当したため, 本稿では, 2015年7月4日に実施した「イクリスせたがや」のワークショップ(以下, ワークショップA)と2016年3月26日に行われた港区の講座(以下, ワークショップB)の二つのデータのみを扱う。以降の論考において, これらの実践に参加した者を「ワークショップの参加者」と称する。

ワークショップAの参加者は合計12名で, 内6名(3組)は夫婦での参加であった。また, 1組のケース以外, 母親が外国人・父親が日本人というパターンに属する者であった。ワークショップBの参加者は合計81名で, 父親が外国人または両方の親が外国人という参加者が多かった。

<sup>10</sup> 「日本語も母語も話せる子どもを育てるために～どうしてますか? 言語教育～」:「イクリスせたがや」(吉田千春, ゴロウィナ・クセーニヤ)が担当, 「家族のことばもにほんごも話せる子に育つには? ～6才までの多言語教育～」:「イクリスいちかわ」(菊地真弓)が担当, 「後悔しない多言語子育て～先輩ママと考える親のライフプランと子どもの言語～」:「イクリスしんじゅく」(安藤陽子)が担当。

<sup>11</sup> 言語社会学者のバソヴァ・オリガ氏(一橋大学大学院言語社会研究科博士研究員)。

分析に使用したデータはワークショップAのディスカッションの内容と、ワークショップAとBの後に実施したアンケートの2種類である。ワークショップAのディスカッションは、ロシア語グループと日本語・英語グループの二つのグループに分かれて約20分～30分行われた。ディスカッションの内容は参加者の許可を取り録音し、全て文字化したものを分析データとした。また、アンケートは、ワークショップAでは12名(参加者全員)、ワークショップBでは35名(参加者81名)より収集できた。

参加者からは、これらのワークショップが自分の子どもの言語教育を考える良い機会となったとの声が多くあり、ワークショップの後、外国人母親が自ら主催して子どもの絵本の読み聞かせ会を実施したり、母親の母語を習うことができる語学クラスに通い始めるといった例が複数見られ、ワークショップが母親の母語継承に対する意識を高めることにつながった事例を確認できた。これらの実践やそれに伴う事柄は参与観察のための重要な機会となり、著者らが研究課題として持つ日本におけるバイリンガル教育の困難さ、また、親にとってのその重要性について様々な角度から確認する場となり、インタビュー調査の考察や分析におけるあらゆるストラテジーの形成に役立った。著者らは今後、本研究の成果で明らかとなった課題を著者らの運営する「イクリスセタがや」の実践に還元し、研究や実践を通しての直接的な社会・地域貢献をしたいと考えている。

### 3. 結果と考察

本稿では、上述の通り、インタビュー調査で行った3人の外国人母親のナラティブやワークショップで得たデータの考察を中心に、移住者第1世の在日外国人母親が子どもに対するバイリンガル教育を試みるに当たり、日常的な場において直面している社

会心理的な要因に焦点を当て、分析を行った。

分析の結果、バイリンガル教育を巡る多様な理論や実践は存在しているが、実際のフィールドにいるのは親であり、最適な理論や実践はあっても、普遍的な解決方法はないことが浮き彫りになった。親の母語に関する子どもの言語能力は、各家族の特別な事情や外国人親の日本語能力、ネットワークの有無とその性質、親や子どもの個性などによって形成されており、似たような状況に置かれた者同士であっても、子どもの言語能力に差がつく。これらの要因について分析した結果と考察を以下に示す。

#### 3. 1. 外国人母親の日本語能力

先行研究において最もよく取り上げられているのは、移住者第1世の親による受け入れ国の言語の未習得であり、受け入れ国の言語を身につけていく子ども達との間のコミュニケーションギャップによるフラストレーション(武田, 2007, p. 118; Shin, 2013, pp. 13-15)である。特にワークショップの参加者の中に、こういった悩みを持つ親が多く見られた。しかし、親が受け入れ国の言語ができたとしても、フラストレーションがなくなるとは限らない。このフラストレーションとしては次の二つが挙げられる。一つは、母親達が日本社会で自然なコミュニケーションツールである日本語が上手に話せると、自分の子どもに対する母語の使用量が減り、自分の言語的アウトプットがコントロールできないことである。もう一つは、子どもが母親の母語を話せない原因が自分にあるのではないかという悩みを持つことである。実際、こういった母親達は、日本語という外国語を成人として身につけたバイリンガルとして見なすことができ<sup>12</sup>、彼女達に起きているのは、

<sup>12</sup> この主張は、言語習得での流暢さより使用に重点を置き、バイリンガルになるための習得時期を子ども時代に限定しない Grosjean (2010) の研究に基づいている。

コードスイッチング<sup>13</sup>のプロセスであると考えられる。母親の母語を話さない7歳の子どもの持つワークショップの参加者（40代前半, 日本滞在歴：10年以上, 欧州出身, 飲食店アルバイト）は, 上記の悩みの原因を, 「私の日本語能力が高すぎる」というように語っていた。また, インタビュー協力者のアンナは, それについて, 次のように発言している。

日本語で話すのに慣れていて。どのようにか分からないが日本語が出てしまう<sup>14</sup>。来日当初, 日本語を身につけようととても必死で, ロシア語も英語も使わないようにしていたので, その時からの成り行きなのかもしれない。今は子どものためにロシア語で話したほうがよいが, どうしても日本語が飛び出す。自分に対して, 「ロシア語を使いなさい!」と言い聞かせることがある。子ども達にロシア語がよりよく覚えてもらうのに, 私は英語も日本語も分からなかったほうがよいと思う。そうすれば, ロシア語を使って, 子ども達もロシア語で話すほか選択肢がなく, 周りはすべてが日本語でもロシア語をスムーズに覚えて

くれたと思う。

アンナのこの発言からは, 日本語が自動的に「出してしまう」, 「飛び出す」と表現される実態が読み取られ, 母語に切り替えるように自分に強く言い聞かせることを必要とするコントロールしがたい領域であることを指す。その結果, 子ども達が思うようにロシア語の習得ができていないことへのフラストレーションが生まれてくる。この悩みは, 日本語ができないほうが子ども達への自分の母語の継承ができたというように, 身につけた外国語を否定的に捉えるスタンスからも明らかとなってくる。実際は, 親が受け入れ国の言語が話せず, 子ども達と母語だけでコミュニケーションを取る場合も, それが必ずしも子どもをバランスバイリンガルに導くとは限らず, 親の母語が使用される身近なコミュニティの存在など, 周囲のサポートや環境といったより多くの要因の関与が必要であると思われる。しかし, 自分の子供達のロシア語習得の状況しか知らないアンナは, 自分自身の高い日本語能力をマイナスに捉えてしまい, フラストレーションを感じている。

アンナと違って, 専攻というよりその他の勉強や仕事のためのツールとして日本語を身につけてきたマヤも, 日本語が普段使われる言語となってきたことについて, 次のように発言している。

最近はあまり意識しない。いつ日本語が出るか分からなくて。やっぱりこれが今の生活なんだ。私のほうができるというか, 私のほうが日本語ができるので, なんとなく, 日本語がメインになってる。日本に住んでるってのもあるかもね。

マヤのこのナラティブにおいても, 日本語が堪能となった以上, 周りにマヤの日本語以上にマヤの共通言語が話せる人がいない限り, 日本語でのコミュニケーションが中心となり, そしてそれが当然なこと（「今の生活」）として捉えられ, 本人が意識しないほど自然に日本語が「出る」状況になっている。

<sup>13</sup> コードスイッチングとは, 1言語以上の交代での使用を意味し, バイリンガリズムの研究において以前から焦点を当てられてきた複雑な現象である。Grosjean (2010, pp. 51-52) の定義によると, コードスイッチングにおいて話し手は, 単語や成句, 文を他言語で発言した後, もとの言語に戻る。Shin (2013) が指摘するように, コードスイッチングは幅広い役割を果たし, 権勢を示すことを含めて話し手の態度や好み, 感情を表現するよう機能しているのである (pp. 131-132, 139)。また, Zhou and Wei (2007) が明らかにしているように, 話し手が感情的になればなるほど, その状況における言語の標準 (マジョリティ言語) を使うことが多い。これらの様相のすべては日本語を身につけた外国人母親が日本にて母語を使ってもよい状況において日本語にスイッチするプロセスを理解するに当たって手助けとなる。

<sup>14</sup> 下線は著者らによるものであり, 本校でのナラティブ分析に用いられる重要なキーワード (いわゆる「コード」) を示している。以下同。

マヤは、努力して子どもに母語で話しかけるように心掛けていますが、子どもがまだ小さいため、それがどのくらい効果があるかははかれない段階にいる。マヤは、子どもへの自分の母語を教えるプロセスについて次のように語っている。

あまりフォースしたくない。彼がやりたかったら教える。彼が興味を持って、「ママの言葉でこれが何？」となった時に教える。

このように、マヤは彼女の子育の方針として、強制せずに、子どもが自然に興味を示すことを待つという個性に寄り添ったアプローチをしていることが分かる。そのため、「[子どもに母親の母語を]話して欲しいが期待はしない」という表現に見られるように、将来、子どもがタイ語を上手に話せなくても、アンナのようなフラストレーションを感じない可能性もある。

一方、ローラは、日本語が初級レベルであり、日本語が「出てしまう」ことに関する悩みは比較的少ないが、彼女も上記2人と似たような経験があるとのことである。彼女は、ある場面において、それまでに誰かと英語や日本語で話した場合、子どもにロシア語で話しかけるために、「一秒をおいて、『おい、我が子、これからロシア語で話しかけるぞ!』と自分にまず言い聞かせないといけない」と語っており、その場の状況においてより自然だと思われる言語が優先されるため、言語の切り替えが難しいことが分かる。

この節では、著者らは次のことを明らかにした。一つは、子どもに対する言語教育のアプローチは、様々な理論や工夫は存在しているが、受け入れ国に移住してくる外国人親の状況（例えば、受け入れ国の言語がどれほど話せるかという要因）が強く影響するということである。日本語が堪能となったインタビュー協力者の母親達が、数年以上住む日本という環境を背景とした時に、日本語が自然なコミュニケーションの手段となり、無意識のうちに日本語が

上位に立つ。産まれた時から話してきた母語のほうが出てきやすいと思われやすいが、これらのケースでは、主体の語学的反応は状況に応じて常に変化し、ある時にある言語（母語を含む）を話そうという人工的な設定には無理があることが分かる。こういった設定が難しいことは、言語のアウトプットは人間にとって、呼吸する、寝る、食べるといった生理的機能に例えることを可能にしている。受け入れ国の言語能力が高ければ高いほど、また、それが上記のように自然なコミュニケーションの言語であるため、自分の母語を話すために過大な努力（自分へのリマインド、言い聞かせ）が必要となり、自分の日常生活を大きく変化させるだけではなく、結果が見えにくいことにより、ケースによっては強いフラストレーションをもたらすことがあると言える。

### 3. 2. 日本社会との接触における外国人母親の「遠慮」

ワークショップの参加者とインタビュー協力者の話から、母親達が子どもを連れて外に出る際、母親の日本語レベルが高くなくても、日本人に遠慮して日本語を使ってしまい、それが多くの場合、無意識のうちに起きていることが分かった。その理由について、ワークショップの参加者からは「無意識に周囲を気にしてしまう」、「目立ちたくなくて遠慮する」、「受け入れられたい気持ちが働いて日本語になってしまう」、「『外人』として見られたくない」という声が挙がった。ある外国人母親（30代前半、日本滞在歴：6年、欧州出身、現在勉学中）は、子どもと2人で公園で遊んでいるにも関わらず、日本語にスイッチしてしまう自分に気づき、今は自分の母語に切り替えるようになったとのことである。彼女が母語を使うようになったのは、「あなたの言語はあなたのアイデンティティなので、恥ずかしく思っただけいけない」と強く励ましてくれた英語圏の友人のおかげであり、このアドバイスを機に、切り



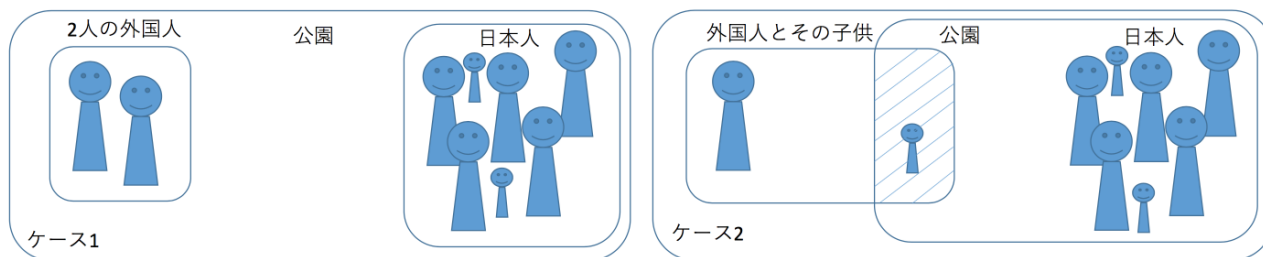


図 1. 外国人母親のハーフの子ども達が果たす役割：ケース 1. 2 人の外国人が自分だけの空間を作り上げ、それが日本人集団とかけ離れた空間である。ケース 2. 子どもが外国人母親の空間と、日本人集団の空間に同時に属している。

替えることに成功したそうである。もし、日本社会がより多様性に理解のある社会であれば、こういった遠慮は生まれなかったことが推測できる。実際、ワークショップ A でのアンケート結果では、家で子どもに対して母語で話したとしても、外で周囲との接触があった場合、日本語に切り替えてしまうことが少なくないことが分かる。例えば、家では子どもに話しかける時に（アンケート項目：「ママと子どもが話す言葉」）母語・日本語の使用上の割合は「母：70%・日：30%」だった母親は、外では「母：10%・日：90%」に変わり、「母：80%・日：5%・英：15%」だった母親は「母：50%・日：10%・英 40%」になり、家でも日本語が既にメインであった母親は「母：10%・日：90%」から「母：2%・日：98%」に変わっており、どのケースでも母語が減り、日本語と英語となっていた。これは、外では周囲に通じるあるいはイメージ上受け入れられやすい言語となると考えられる。

また、1 人のワークショップの参加者（30 代前半の外国人母親、日本滞在歴：4 年、欧州出身、専業主婦）の事例ではあるが、一時保育の先生に子どもに対して日本語で話すように言われたことがあるそうである。先行研究では、こういったアドバイスが母語維持を妨げ、親子のコミュニケーションを困難にさせるため非常に有害であるとされている（Shin, 2013, p. 13）。このようなことを言われた外国人母親は、外で母語を使うことに対して更に遠慮を感じると考えられる。

ディスカッションでは、上記のような遠慮が発生する理由として、外国人に対し未だに用心的である日本社会があるとし、「特別扱いをされたくない」、「社会のごく一般の人として受け入れられたい」という気持ちが多く挙げられていた。しかし、ここで注目すべきだと思われるのは、外国人母親のハーフの子ども達が果たす役割である。例えば、同じ国籍の 2 人の在日外国人が公園などの公共の場に行った時、互いに自分の母語以外の言語で話すことは極めて想像しにくいことであり、周囲を気にせず、むしろ周囲から離れた空間を作り上げる。「図 1：ケース 1」は 2 人の外国人が自分だけの空間を作り上げ、それが日本人集団とかけ離れた空間であることを示した図である。しかし、彼女達のハーフの子ども達は、国籍上は日本人、エスニシティ上も少なくとも半分日本人であることから、そこにいるハーフの子ども達が、自分と日本社会をつなぐ中間的な役割を果たしていると言える。「図 1：ケース 2」は子どもが外国人母親の空間と、日本人集団の空間に同時に属していることを示した図である。これにより、自分が社会で母親の役割を果たすに当たって、子どもに話しかける時、その内容が、子どもがその一部である周囲にも分かって欲しいという心理が働く。一時保育の先生に、子どもに対して日本語で話すように言われた時にそれをそのまま受け入れてしまう心理もこの実態に隠されていると思われる。

ここで、インタビュー協力者達のナラティブに注目すると、アンナは、上記の実態について次のよう

に語っている。

子どもと公園で散歩する時、どの言語で話しかけたほうがいいのかと戸惑ってしまうことがある。「気をつけて、転ばないでよ」と言う時に、子どもにだけ言うのだが、周りは日本人ばかりなので、一部のフレーズは日本語で言ったほうが良いと思う。

このナラティブから、決定的要因として働くのは、周りに日本人しかいない、という状況であり、子どものことを周囲に分かってもらえるように、遠慮して日本語を使うのである。

また、ローラは、外で子どもとコミュニケーションを取る時、場面や参加者によって使いわけるように心がけていると語っている。彼女は、周囲に知らない日本人がいる場合は、ロシア語を使っているとのことだが、日本人や外国人の友人と会う際、状況に応じて子どもに対しても日本語や英語を使うとのことである。

子どもは他の子ども達と何か問題、コンフリクトが生じた時に、その子ども達にも理解してもらおうように、当然日本語で話しかける。つまり、みんなの前でのしつけとなる。他の人達にも分かってもらわないといけない。そして、それは自分の子どもに、日本人の子ども達を適切に認識し、どのように話しかければよいか分かってもらうためでもある。その他の参加者がいない場合は、ロシア語で話しかける。

ローラは状況に応じて、できるだけ言語を使い分けるように努力している。その中で、自分の子どもにも、複数の言語が話せるようになってほしいと期待しているので、日本人には日本語で話し、人によって使い分けることの必要性に気づかせようとしている。ここで興味深いポイントとなるのは、ローラは、日本人の子ども達との関係構築は日本語を通じてしか成り立たないと考えていることであり、子

どもへの言語の使い分けのアプローチにおいてこの気づきを取り入れた振る舞いをしていることである。

本節では、外国人母親が子どもを通じて日本社会と接触する際に感じる遠慮の働きについて考察した。就学前の時期であるため、接触点は比較的少ないが、中でも外国人母親が周囲を意識して日本語を使うようにしていることが明らかになった。それが母親にとって日本社会との媒介者となるハーフの子どもの存在に特徴づけられ、子どもにアイデンティティについても学習させる試みにもつながっている。しかし、日本社会自体が多様性に欠けているため、外国人母親がストレスを感じないように過ごすには、日本語を使う以外の選択肢が残されていないと言える。

### 3. 2. 1. 「オアシス」としての児童館などの施設

マヤにインタビューをしたのは、都内の親子で過ごせる C 施設である。著者らは、ワークショップでの話により、外国人親が児童館などの施設を使うことが少ない傾向に気づいた。そのため、マヤがインタビューの場所として C 施設を設定したのは、新鮮だった。その入り口でゲストとしての登録が必要であったが、英語での簡単な要旨が用意されており、スタッフは英語を話せなかったが、要旨やその他英語で書かれた案内からは外国人に対するフレンドリーな雰囲気を感じられた。マヤは、この施設に非常によく来ており、外国人が多く訪れる施設であると案内され、彼女のナラティブを通じて、この施設ならば、母親達は遠慮を捨てることができるのではないかと思った。もちろん、すべての施設はそこまでオープンであるとは限らず、アンナのように「圧倒されて、返ってストレスとなる」という声もある。一般的な保育園に預けない方針にしているマヤは、日本での子育てにおいて C 施設に定期的に通っていることについて次のように語った。

できるだけコミュニケーションができる環境

を整えていきたい。だからこうやって、すごく好きなのね、ここ。子どもが絶対大きく  
なって見るわけ、コロンビアの子がコロンビア語でママとしゃべって、でもあなたに向かって英語しゃべってるわけ。言葉をたくさん  
できるのが普通の環境。

このナラティブではっきりと見えてくるのは、一般的な日本社会において、彼女が必要としている環境がないことから、それを「整える」必要性であり、それを追求し、多文化的な環境が逆に「普通」であるC施設に通っていることである。こういった場所は、彼女自身のタイ人としてのエスニシティや、子どもの持つタイ人と日本人との間のハーフとしてのエスニシティを超えた場となり、多文化・多言語に根付く体験を与えるのである。このような体験を日本で身につけていく彼女の子どもが、将来アイデンティティの揺らぎを感じず、日本に居ながらも、複数のエスニシティを持ち、複数の言語を話し、また、それを相手によって使い分けることを当たり前のよう思ってくれることが彼女の希望である。

ローラも地域の児童館に行くことにより、英語が話せる日本人母親と知り合い、ネットワークを作ること成功したとのことである。自宅で定期的に外国風の持ち寄りパーティを開催するようになり、それによりホームシックだったことや子育ての負担を少し減らせたと話していた。彼女もマヤと同様、英語は外国語として習ったが、上級のレベルであり、英語でのコミュニケーションを通じて日本での自らの外国人としてのアイデンティティを再生している。しかし、彼女にとって児童館は、子どもの教育のための有意義な場というより、自分自身にとっての居場所やストレス解消の手段となっていた。

一方、アンナは児童館などに行ったことがなく、児童館を自由に入れて親子で快適に過ごせる場所としてのイメージを持っていなかったとのことである。また、彼女も上記2人と同様に英語が堪能だが、自

分のアイデンティティの構築に英語は含まれていないとのことで、英語圏の出身ではないのに、日本人に常に出身国がアメリカなのかと聞かれることや、英語で話しかけられることに対して違和感を覚えていた。

このように、ケースによって差異はあるが、インタビュー協力者は、一般的な日本社会は本当の意味での多文化環境が整えられていないと感じていた。また、アンナの事例のように、外国人が必要以上に「外国人化」されることがあるため、日本人を対象とした一般的な親子のための施設や児童館などは外国人母親に敬遠される場となることが明らかとなった。一方、児童館などの施設は、地域によってその有り様は異なるものの、マヤの通うC施設のように多文化のオアシスとして機能し、外国人母親にとっての多文化的な環境やネットワークづくりの場となり得る潜在性を持つ。

### 3. 3. ジェンダーの役割による負担

日本における伝統的なジェンダーの役割は、移住者の母文化による影響など、細かな差異はあるが、外国人女性が日本人男性の妻となる家庭においても再生され、家事や子育て、子どもの教育は母親の領域<sup>15</sup>として見なされることが多い。

これに関しては、母語の継承の観点から見ると、母親が父親より子どもとより多くの時間を過ごしているという点では、母語の継承がよりスムーズに行われると思われるが、サラリーマンの夫を持つアンナの次のナラティブに見られるように、母語の継承は努力を必要とするものであり、家事や子育てに全てのエネルギーを費やしてしまうと、言語教育のための余裕がなくなる。これは、上記の節で示したように、社会での自然なコミュニケーションのツールは日本語であり、外国人母親が母語で話すには時に

<sup>15</sup> 日本人母親を取り巻く議論について White (2002) と Holloway (2005) を参照。

は自分への言い聞かせといったコントロールを必要としていることと併せて考えればより明らかとなってくる。

家事に追われ、何も間に合わない。誰かに連絡したり、会うための約束をしたりすることさえできない。この時期をどうにか乗り越えなきゃ。この疲れは、子どもへのより計画的なロシア語教育を与えるための大きな障害となっている。夜は特に、何か言葉を言い出す時、微笑みの表情さえ作れなく、何かに対して反応するための力がない。これでロシア語ができると思う？

ローラは、特に子どもが乳児であった際、アンナと同様のストレスを感じ、彼女をその時に救ったのは、スカイプでの母国の親友とのコミュニケーションであったと語っている。これに時間を使ってしまっ、家事も回らなかったとのことだが、「疲れすぎて死んじゃう」という言葉しか言い出せなかった時、唯一の助けだったそうである。

乳幼児の子育ては特に大変であり、それを夫以外の家族と離れて行わなければならない、ローラのように来日直後の時期であれば、また、アンナのように家事や子育ての忙しさを友人関係を保つことができなければ、日本社会への十分な統合ができず、孤立化してしまうことがある。このような状況を背景とした場合、母語の維持、特に普通に話すことを超えた行動（例えば、寝る前の本の読み聞かせなど）は一層難しくなり、外国人母親のための支援は不可欠であると言える。

### 3. 4. 日本人の夫による子どもの言語教育への関与

上記の通り、子どもの教育全般は母親の役割として見なされ、母親の母語の継承における父親の関与

は全体として低い<sup>16</sup>。アンナの場合、夫がロシアへ留学経験があり、仕事でロシア語を使用することもあり、子どもと積極的に妻の母語を使っているが、こういったケースは希である。

図 2 は、ワークショップ A を中心に集計したアンケート結果で、「パパと子どもが話す言葉」を示したものである。母親の母語が積極的に使われるケースは、夫が留学の経験をしたというケース（ケース 1 と 8, そして 3）に限る。

Grosjean (2010, p. 5) は、受け入れ国の者が移住者の言語を学ぶという互酬的な行為は希だと述べているが、著者らが記録した状況では、それが受け入れ国の者（本研究の場合は夫）が妻の母国に留学をした経験の事例に限定される。例えばローラの場合、彼女の夫は 10 年近く英語圏で過ごし、仕事でも英語を使っており、ローラの日本語が初級であることも関係して、家庭内のコミュニケーション言語を英語にするように求めているとのことである。一方、妻の母語に対する態度はローラの次のナラティブから明らかとなる。

彼はロシア語には関心がなく、今まで関心を持ったことがない。自分にとって必要としていないため、問題視していない。しかし子どもの教育については、「ロシア語で話すのをやめないで」といつも言っている。

<sup>16</sup> 本節に紹介される調査結果は、イギリスにおける日（母親）英（父親）のカップルでの児童のバイリンガリズムを研究する Okita (2002) による研究成果と共通性が見られる。Okita によると、例えば、子育てを行うに当たってバイリンガリズムについての文献を読んだと答えたのは 32%の母親と 11%の父親であり、誰かと積極的に議論したと答えたのは 47%の母親と 16%の父親であり、父親による関心がより低いと指摘している (Okita, 2002, pp. 78, 222-223)。このように、父親が受け入れ国でのマジョリティ言語の話者である場合 (Okita のサンプルではイギリスにおけるイギリス人父親、本稿の著者らのサンプルでは日本における日本人父親)、権力関係やジェンダー関係が機能し、移住者の母親のほうが子供への言語継承を負担すると言える。

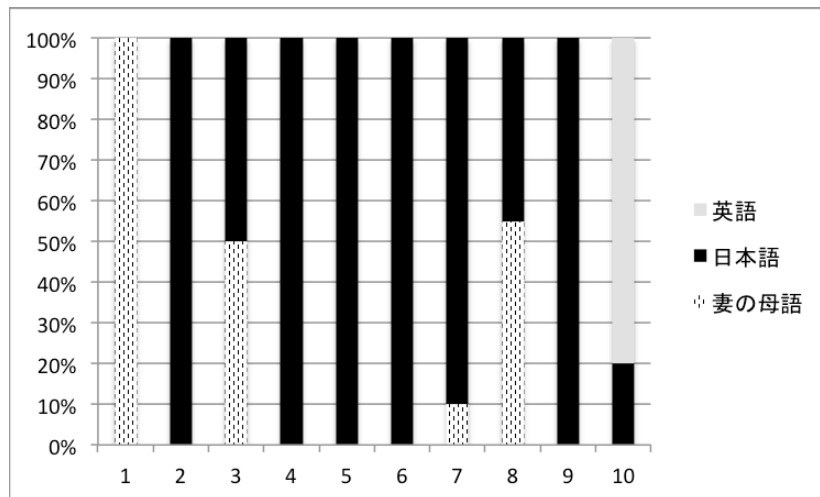


図 2. 夫と子供とのコミュニケーションの際の言語使用：この図はワークショップAで集計したアンケートの結果であり、10人の回答者による「パパと子どもが話す言葉」との項目への回答をまとめたものである。アンケートの対象者は国際家族であり、主として外国人（欧州）母親と日本人父親といったカップルである。回答者はワークショップに参加した家族のメンバーにより異なるが、主に外国人妻による執筆である。

ローラの夫は彼女の母語を否定はしていないものの、子どもへの母語の継承のために、自らの努力はしていない。そして、3人が揃った時の共通言語は英語にするよう求めている。これは、彼が英語圏への長い留学と仕事の経験があり、英語に個人的な関心があるからである。その留学がロシアであれば、個人的な関心はロシアに移り、共通言語としてロシア語を選んでいただかもしれない。また、彼は子どもへの母語の継承の大変さを理解しておらず、妻にその努力を独自で行うように勧め、妻の言語の母語継承を家庭の問題とは捉えていない。同様に、ワークショップの参加者である日本人夫（30代前半、妻は欧州出身）も、子どもへの母親の母語の継承について「やりたければどうぞ」と話していた。一方、上述したアンナの夫は子ども達とロシア語で話したがるものの、仕事で忙しく家族で時間を過ごすことが少ないことから、それが実現しにくい現状にある。また、マヤの夫もタイへの留学の経験から日常的な会話ができ、子どもに対してはタイ語を使わないが、母と子どもの会話は理解できる。多くのワークショップの参加者は、妻の母語を全く理解しない夫と一緒にいる時は、夫を孤立化させないように日本

語を使うと語っており、夫が簡単な日常会話でも妻の母語が理解できれば、子どもへの「母親の母語の継承が楽になったのに」と訴えていた。

上記二つの節では、伝統的なジェンダー役割の再生による家事や子育て、子どもの教育を担う外国人母親の負担を子どもの言語教育を妨害する要因として考察し、父親による母親の母語の継承における努力が見られるのは、彼らが妻の母国で留学・仕事をしたというケースに限定されることを明らかにした。こういった家族では、子どもが母親の母語を習得できる可能性が高まると考えられる。しかし、日本人夫が妻の母語を話せないケースのほうが一般的であり、これは、外国人母親への支援の必要性を浮き彫りにし、日本人夫に対して母語の継承の重要性を伝える働きかけが必要であると思われる。

### 3. 5. 外国人母親から見た子どものエスニックアイデンティティ

外国人母親が、自分の母語を子どもに継承する際、重要な要因となるのは、子どもをエスニックアイデ

ンティティ<sup>17</sup>の観点からどう捉えているかということである。Basova (2013, p. 350) は、子どもと自分の母語を使わない外国人母親が少なくなく、日本語のみでのコミュニケーションを教育面での合理的かつ効率的な選択肢として見なしていると述べている。それは結果的に、子どもを日本人として育てることを意味する。実際、自分の子どもを日本以外のエスニシティの持ち主として育てるには、様々な要素を考慮しなくてはならず、時にはそれらの要因を戦略的に揃えなければならないのである。ローラは、子どもがロシアで長期滞在ができるように、子どもにロシア国籍を与えたいと考え、一時帰国しロシアで出産をしているが、アンナとマヤ、そしてワークショップの参加者は、このような戦略は考えもしなかったとのことである。外国人母親は多くの場合、エスニックの属性を子どもの外見から得ようとしている。また、大きな影響を与えているのは、その家族、すなわち母国の親と夫の親である。あるワークショップの参加者(30代前半、日本滞在歴:10年程度、欧州出身、語学教師)によると、母国の親が孫に対し、「完全な日本人」、「侍」、「うちの血はぜんぜん流れていないようである」というように発言しており、彼女自身はこのようなステレオタイプ化に抵抗してはいるが、その影響を受けざるを得ないと語る。「スカイプをしている時に、孫と母語で話せばいいのに、なぜかおかしい発音で『こんにち』と言ったり、[親が母国で]日本語学校で日本語を勉強すると言いつたりして、[子どもが母語を話すために]ちっともためになっていない」と述べていた。また、このワークショップの参加者は、子どもの出産に立ち会った母国からの親戚が、出産後すぐに「日本人だよ」と母国に報告していた場面について語った。このワークショップの参加者は自

分の親戚の上記のような発言に戸惑っており、孫が完全に受け入れられていないように感じると話していた。このデータは、少なくとも祖父母とのコミュニケーションのために子どもに自分の母語を継がせ、祖父母と一緒に時間を過ごしてもらいたいということをも母語の継承のモチベーションとする移住者の考え(インタビュー協力者の3人にとってもこれは一つの大きな原動力である)を異なるパースペクティブに位置させる結果となっている。母国の両親が孫を日本人として捉えることは、外国人母親にとって日本人以外のエスニックアイデンティティを否定することにつながり、母語の継承が葛藤の多い領域であることを示唆する。

また、日本の夫の両親に関して、マヤは次のように語っていた。

特に、サポートと言うより反対してないということ。私が子どもとタイ語でしゃべっていると、「分からないわ、いいな、ママと2人でシークレット」とか、そういう言い方で。[省略][義母は]日本語の絵本買ってくれる。だから、まあ、お母さんはお母さんなりにちゃんと日本人になって欲しい、私もタイ人になって欲しい。

このナラティブで興味深いところは、マヤの義理の母が、自分がタイ語を理解していないことを指し、孫のタイ人としてのエスニシティをママとだけの秘密の世界として捉えていることである。一方、アンナの場合は、子どもが日本人と話す時、ロシア語の言葉が混ざりようになったため、義理の母は簡単なロシア語を勉強しはじめたとのことである。アンナの義理の母は、まだロシア語で会話はできないが、食べ物の名称などを覚えてロシア語の使用に積極的であり、子どもの日本人のエスニシティに加え、ロシア人としてのエスニシティ意識の維持に大変役立っているようである。

この節では、対象となった外国人母親は、多くの

<sup>17</sup> 日本におけるハーフのアイデンティティについて Kamada (2010) を参照。

場合、自らの子どものエスニックアイデンティティについて探索の段階にあり、母国の両親と日本での義理の両親による発言や行動がこのプロセスを左右する要因であることが分かった。

#### 4. 結び

著者らは本研究のプロジェクトをはじめた時、外国人親が家庭で子どもに対してどのように母語の継承を実践しているかを研究すると同時に、先行研究において児童のバイリンガル教育で重要とされる言語戦略 (Grosjean, 2010, pp. 205-217) (あるいはプラン) を在日外国人親が考え、設計できる機会を作ることを目指した。そして、ワークショップの実践やインタビューを通じて明らかになったのは、幼い子どもを持つ在日外国人親は、様々なアプローチはしているものの、長い目で見た言語計画やそれに合わせたプランといったもの (例えば、いつ、どこで、誰が子どもと何語で話し、子どもを誰に会わせるなど) を殆ど持っていない、フラストレーションのもととなる試行錯誤を繰り返していた。例えば、アンナは子どもの言語教育に関するプランについて尋ねられた時に、考えたことがなかったと答えていた。この例からも分かるように、子どもへの外国人親の母語の継承は移住者の誰にとっても身近な問題でありながらも、バイリンガリズムについての知識や時間的な余裕、そしてサポートネットワークを必要とし、母親だけでは決してカバーしきれない課題であることが分かる。多くのワークショップの参加者とインタビュー協力者は、子どもの言語習得状況が将来どうなって欲しいかという大きなビジョンを持っていても、それにつなげる段階的なプランを持っていない、計画的な取り組みまで至っていないことが多い。一部の対象者は、ワークショップやインタビューに参加したことにより、子どものバイリンガリズムを初めて真剣に考えるきっかけとなり、

それ以降、積極的に戦略を持って行動ができるようになったと語った。

本稿では、在日外国人母親の語りを中心に、子どもへの母語の継承に影響を与える様々な社会心理的要因を考察した。主な要因は ①外国人母親の日本語能力の影響、②外国人母親が自分の母語を使いにくい日本社会の影響、③日本におけるジェンダー役割分担による女性の負担、④夫が妻の母語を学習するという互酬的な行為の無さ、⑤外国人母親自身が子どものエスニックアイデンティティについて模索の段階にいることやそれにおける両国の祖父母の影響の5つにまとめられた。このように、外国人母親の母語を子どもに継承することは、多くの要因から影響を受け、葛藤を引き起こす問題であることが明らかになった。これらのすべての要因は日本における外国人としてのアイデンティティの形成・維持と関わる問題である。その一部は日本社会が多文化に寛容になることにより改善ができると考えられる。母語の継承は自然にできると思われがちだが、実際は失敗例が多い。今後は本稿のような具体的な研究成果に基づき、外国人親が子どもの言語教育に関する戦略的な計画を設計できるように、コミュニティや行政といった外側からの実践的な支援が不可欠である。本稿で示された5つの要因は、母語継承の失敗例や困難さを説明するものであり、ここで得られた知見を活かし、今後の具体的な支援を検討していく必要がある。支援の例となり得るのは、バイリンガリズムにおける実践を専門家が紹介するインタラクティブ型のイベントや、移民国の例に習った外国人親の母語維持の戦略をもとに、母語の継承に関わる問題を個人の領域から公共の領域、更に福祉に移すためのイニシアティブである。現段階でできることとしては、外国人母親の日本人夫への働きかけなど、ローカルなレベルでの支援から始めることが望まれる。また、この研究成果を「イクリス」の活動にも活かし、引き続き「母語ワークショップ」や

「多言語絵本の読み聞かせ会」といった母語の継承を促進する取り組みを行っていく予定である。

## 文献

- ゴロウイナ・クセーニヤ (2017). 『日本に暮らすロシア人女性の文化人類学——移住, 国際結婚, 人生作り』明石書店.
- 齋藤ひろみ (2005). 日本国内の母語・継承語教育の現状と課題——地域及び学校における活動を中心に『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』1, 25-43.
- 武田真由美 (2007). A 県における在日外国人の子育てニーズに関する探索的研究——在日外国人保護者, 行政担当者, 支援者へのインタビュー調査より『関西学院大学社会学部紀要』103, 115-127.
- 中島和子 (2016). 『バイリンガル教育の方法 (完全改訂版)』アルク.
- 日本政府観光局 (2016年4月). 「訪日外客数 (2016年4月推計値)」[http://www.jnto.go.jp/jpn/news/press\\_releases/pdf/160518\\_monthly.pdf](http://www.jnto.go.jp/jpn/news/press_releases/pdf/160518_monthly.pdf)
- マーフィ重松, S. (2014). ミックスルーツの人々にとってのホームを探す物語——「私たち」のストーリーを語るということ『異文化間教育』40, 85-96.
- Basova, O. (2013). Redefinition of Russian immigrants in Japan since the second half of the 1990s: From the standpoint of language maintenance of post-immigrant generation. 『言語社会』7, 362-342.
- [Chirsheva] Чиршева, Г. Н. (2012). Детский билингвизм: Одновременное освоение двух языков. Санкт-Петербург: Златоуст. (タイトルの和訳: 『児童のバイリンガリズム——二言語の同時習得』)
- Gottlieb, N. (2012). *Language policy in Japan: The challenge of change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Grosjean, F. (2010). *Bilingual: Life and reality*. Cambridge: Harvard University Press.
- Hatori, R. (2005). A policy on language education in Japan: Beyond nationalism and linguisticism. *Second Language Studies*, 23(2), 45-69.
- Holloway, S. D. (2010). *Women and family in contemporary Japan*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kamada, L. D. (2010). *Hybrid identities and adolescent girls: Being 'half' in Japan*. Bristol: Multilingual Matters.
- Okita, T. (2002). *Invisible work: Bilingualism, language choice and childrearing in intermarried families*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Shin, S. J. (2013). *Bilingualism in schools and society: Language, identity, and policy*. New York: Routledge.
- Weatherford, Y. (2006). The Linguistic development of a Japanese-English bilingual at age two: A case study. 『立命館言語文化研究』17(2), 209-219.
- White, M. I. (2002). *Perfectly Japanese: Making families in an era of upheaval*. Berkeley: University of California.
- Yoneno-Reyes, M. (2015). Overcoming language barriers: Filipino/Japanese youths as transmigrants in the Philippines. *Asian Studies: Journal of Critical Perspectives on Asia*, 51(1), 1-38.
- Zhou, Y., & Wei, M. (2007, March). *Code-switching as a result of language acquisition: A case study of a 1.5 generation child from China*. Paper presented at the Annual Teaching English to Speakers of Other Languages (TESOL) Conference. Seattle, WA.



Article

## Socio-psychological factors in passing on a mother tongue to preschool children: Exploring narratives by foreign mothers in Japan

Ksenia GOLOVINA\*

*Center for Global Communication Strategies,  
University of Tokyo, Japan*

YOSHIDA, Chiharu

*Graduate School of Global Japanese Studies,  
Meiji University, Tokyo, Japan*

### Abstract

This study explores the circumstances and initiatives pertaining to family language education of children living in Japan with a non-Japanese (foreign) mother. The study establishes the socio-psychological factors that impede passing the mother tongue on to the child, based on empirical research in the form of a series of interviews and workshops. The aim is to develop a support system for foreign residents with regard to maintaining their mother tongues. Through the research, five factors were identified as influential in passing a mother's native tongue on to her children. These are the foreign mother's level of knowledge of the host country's language; difficulties in freely using one's mother tongue in Japanese society; women's burden due to the unequal division of gender roles; the lack of reciprocal learning of the wife's mother tongue by the Japanese partner; and the foreign mother's uncertainty with regard to her child's ethnic identity.

Copyright © 2017 by Association for Language and Cultural Education

*Keywords:* mother tongue maintenance; bilingual education; foreign mothers in Japan;  
mixed children; socio-psychological factors

---

\* *E-Mail:* kgolovina@cgcs.c.u-tokyo.ac.jp